

大通公園を望む窓辺から

行方不明者にならないために

会長 長瀬 清

日本人の平均寿命は、終戦直後の1947年に男50.06歳、女53.96歳であったものが、2013年ついに女性とともに男性も80歳台に突入した。男80.21歳で香港、アイスランド、スイスに次いで世界第4位、女は86.61歳で第1位をキープしている。また、団塊の世代が高齢者の仲間入りをし、高齢社会は頂点を迎えることになる。2025年には65歳以上の人口は3,660万人、2042年には3,880万人と予測されている。欧米では高齢社会から超高齢社会に至るまでには100年かかるというが、日本は37年で超高齢社会を迎えてしまった。

そこで問題になるのは、心臓病、脳血管障害、糖尿病、誤嚥による肺炎等の病気に加え、認知症や四肢運動器疾患が増えることであり、その対策を急がなければならない。

平成25年厚労省研究班調査によれば、認知症患者数は462万人に及ぶという。昨年1年間に認知症で行方不明になった人が1万人を超えた。行方不明者は自分の名前を忘れ、住む家も覚えていないため施設に保護されているか、行き倒れになり無縁仏として扱われているのだろう。その数は今後ますます増え続けることになる。国は認知症施策推進5か年計画（オレンジプラン）を25年度にスタートさせた。

また、年をとると動きが鈍くなり、転倒し骨折するため寝たきりになることが多くなる。そのための対策として日頃のウォーキングが大切である。歩くことは血流を増し、先に述べた認知症の予防にもよく、1日7,000歩ほど歩くと良いという。

昨年7月の朝日新聞「天声人語」で、認知症を防ぐには「きょうよう」と「きょういく」が大切というのが話題になった。「きょうよう」とは、教養ではなく『今日用がある』、「きょういく」は教育にあらず『今日行くところがある』、であるという。毎日用をつくり、毎日出かけることは、頭も活性化され、足腰も鍛えることになる。認知症を防ぐ実行可能な有力な手段であり是非とも実行し、継続したい。

後悔

理事 松家 治道

皆さんは漫画家の高橋留美子氏が連載している「境界のRINNE」という作品をご存じでしょうか。主人公は、祖母が死神、祖父は人間として生まれ、成仏できない霊を輪廻の環に導く高校生の六道りんね。死後の世界、来世をテーマとして良く描かれております。気が付くと、還暦も過ぎ、古希が近くなっているもの、何時までも若い気ですが、日本人男性の平均寿命が発表されますと、つい引き算をしてしまう自分がございます。

そうした中、最近読んだ本の中に面白いものがありました。パスカルがその晩年に著した遺稿である「パンセ」について、評論家の渡部昇一氏が触れられたものです。

「パスカルは「パンセ」の中で、死後の世界や奇跡や神というものは、確率論的には、絶対に存在すると考えて生きた方がいいと言った。彼はそのことを信仰の立場ではなく、科学者としての立場で立証しようとした。例えば、死後の世界や神様などは存在しないと生きて生き、死んでみて、本当になかったのならそれでいい。何ら問題はない。また死後の世界や神様があると信じて生きていたが、死んだらなかったとしても、その場合は死んだ当人も分からないからそれでいい。しかし死後の世界や神は生きている人間には見えない。だからあるかどうかは、死んでみなければ分からない。だから、あるかもしれない。そして、本当に存在したとするとどうなるか。存在しないと生きて、生前、好き放題なことをし、他人に迷惑をかけ、悪いことばかりして生きてきて、死んでみて、死後の世界や神様がいることに気付いても、もう遅い。神様に生前の悪事をこっぴどく罰せられるかもしれないし、閻魔大王みたいのがいて、審判されるかもしれない。そうになったら大変なことになる。だから、今は全く分からないけれど、死後の世界も神も存在すると考えて生きた方がいい。確率論から見てもそうなる、というのがパスカルの考えである」（『知余余の方法』）

が、その「晩年」が三十代半ばだった神学者パスカル。俗世をその倍生きた身には、あーあもう遅かった。残念。

